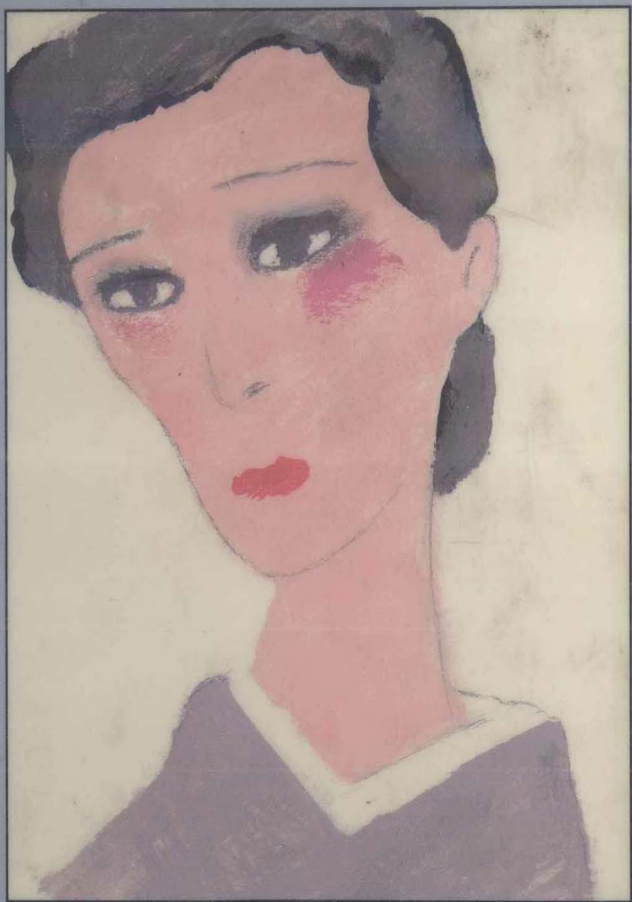


ひとりぼっちの鳩ポツポ



佐藤愛子

ひとりぼっちの鳩ポツポ

佐藤愛子

ひとりぼっちの鳩。ポッポ——一、一〇〇円

著 者——佐藤愛子

編集人——谷亀利一

発行人——堀内 稔

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一

大阪市北区野崎町八の十

北九州市小倉北区明和町一の十一

〒一〇〇
〒五三〇
〒八〇二

印刷所——明和印刷

製本所——堅省堂

第一刷——昭和六十一年九月十二日

© 佐藤愛子 昭和六十一年

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

ISBN4-643-74570-3 C0093 ¥1100E

Printed in Japan

ひとりぼっちの鳩ポッポ

装画·装丁
灘本唯人

この頃、津島歌代は、娘の亜矢がにくらしくなつて来た。いや、にくらしいというよりも、怖いといった方が適切かもしれない。歌代には亜矢の考えていることが、皆目わからないのである。大学三年の二十歳といえば、歌代が銀行に勤めて親を助けていた年だ。手どり六千二百円の俸給のうち、四千円を家に入れて、二千二百円の中から必ず五百円を貯金していた。結婚する時は、出来るだけ親に心配をかけたくないと考えていたからである。

「だから、お父さんが私を見込んで下さったのよ……」

そんな話をするのも、なにも自慢をしたいからではなくて、若い娘はいつ、どこで、誰から観察されているかわからないから気をつけなければ、ということをお願いしたいからなのである。しかし亜矢は、

「わしゃ、そんな男、いやだね」

とにべもない。そんな男、とはつまり父親の健太郎のことである。健太郎はその頃、同じ三星銀行の若手行員の中で最も将来を嘱望されている有望株だった。若い女子行員の中には、心ひそかに健太郎の目に止ることを願っていた者も少なくなかったのだ。

だが、亜矢は、買いたい物も買わずに五百円ずつ貯金をしている娘に目をつけるなんて、「そんな男、いやだね」というのである。

いったい亜矢は二十にもなって、どうする気なんだろう。中学から高校、大学生になるまで、男女共学であるにもかかわらず、恋人はおろか男友達というものが一人もいないとはどういうことなんだろう？ 歌代はそれが心配である。

隣の加宮夫人は、亜矢と同年の妹娘の圭子に「砂糖に蟻がたかるように」若い男がむらがつてくるといっていつも心配しているけれども、亜矢は鬼も十八番茶も出ばなの十八歳が三年も前に過ぎたというのに、男の声で電話ひとつかっできたことがないのである。

亜矢はアグラをかいてご飯を食べる。テレビの番組を見て、ゲラゲラ笑いながらおならをする。

「ごめんなさい、は？」

子供の頃はそういうと、素直に、

「ごめんなさい」

と謝ったものだ。だが今は

「ごめんなさいは？」

といっても黙殺されるだけだ。テレビに目をやったまま、

「わーッはッはッはア……こりや、ケツサク……」

ひとりで喜んで身体を左右にゆすって膝を叩きながら、まるで反抗ののろしを上げるように、

「ウウ！」

当たりかまわず放つのである。

「大槻の雄チャンたら、可哀そうに、奥さんに逃げられたんだってさ」

亜矢が突然、そういったのは、三か月前の夏の盛りである。丁度、夕食の最中で、歌代は夫のために鰯の身から骨を外しているとところだった。健太郎は魚の骨を取るのが面倒だといって、魚を食べようとしなからである。

「大槻の雄チャンで、あの大槻先生かい、高校の時の担任の……」

と姑のひさ子がいった。

「うん、奥さんはスゴイ美人だったからね、雄ちゃんにはムリだと思ってたんだよ、やっぱりダメだったんだね」

「逃げられたというのは穏やかじゃないね」

ひさ子がいった。

「つまり離婚したってことなんだろう？」

「そうじゃない、逃げられたのよ。離婚もヘツタクレもない状態よ。いなくなっちゃったんだって」

「じゃあちよつとした夫婦喧嘩かなんかで、お里へでも帰ったんだ……。そのうち戻ってくるよ。夫婦なんでものはね、長いうちには何度かそんなことをくり返して、しまいには飽きがきてやめるんだよ」

「おばあちゃんもそうだったの？」

と高校生の透が口を出した。

「そうだよ。わたしもママだったねえ、あの頃は。あんまりしょっちゅう里へ帰るもんだから、母さんがいったわ。お前、電車の回数券を買った方がいいよって、ハハハ……」

歌代は何もいわないで鰯の小骨を取っていた。その時の気持をどういえばいい

のか。それから三か月経った今、歌代に伝えることは、その日から歌代の悩みが始まったということだった。

2

その悩みは、辛いけれどもハリがある、悲しいけれども幸福感がある、自責もある、心配もある、ときめきが心臓を圧迫して息苦しくなる、というようなものだ。三十三歳の高校教師大槻雄吉を、いつか愛していた自分に歌代が気がついたのがその時である。

大槻雄吉は亜矢が高校二年の時の担任教師である。はじめて彼を見たとき、テレビの学園モノに出てくるサッカーの教師のような青年だ、と思ったことを歌代は憶えている。

「大槻先生ってハンサムねえ」

はじめの授業参観日から帰って来て、亜矢にそういうと、

「アレがかねエ？」

びっくりしたといわんばかりに、頭のとっぺんから声を出し、

「ポッポだねエ、ハトポッポ！」

といった。

「ハトポッポってなあに？」

「ハトポッポってのはハトポッポだよ。わかんない？ 子供っぽくて、無邪気で

……バカげてる……ってこと」

「じゃあ母さんがバカげてるっていうの？」

「とにかく大槻の雄チャンをハンサムっていうんだから、ハトポッポだよナア」

亜矢にそういわれても、歌代が大槻雄吉をハンサムだと思うことに変りはなかった。

「大槻先生の歯って、歯磨きのテレビコマーシャルに出したいようねえ……強そうで、固そうで、まっ白に光ってるわ。若さそのもの、眩しいようだわ」

いうまいと思っているのに、つい、そんなことをいつてしまった。

「テレビコマーシャルはよかったネエ」

と亜矢は笑いこけ、

「雄チャンがリングを噛む。サクツと音が入って、リングを食べても血は出ません！ か……雄チャン、ニンマリ……ワハハ、これはイけるワ、明日、カノコに話してやろ」

要するに亜矢と歌代は感覚が異質なのだということに歌代が気がついたのは、その頃からである。

亜矢が高校三年になって間もなく大槻雄吉は結婚した。雄吉の妻は私立中学校の英語の教師で、「男子生徒にモレツツ人気があるんだってさ」と亜矢が報告した時、唐突に目の前に灰色の幕がおりたような気がしたのだった。

その後も雄吉の噂が亜矢の口から出るたびに、歌代の胸は曇ったり晴れたりしたものだ。亜矢が三年になって雄吉の担任でなくなっても、PTAで学校へ行くたびに、殆ど無意識に彼の姿を捜している自分に気がついたこともある。

考えてみればあれから三年経ったのだ。亜矢が高校を出たこともあって、いつとはなしに薄らいでいた雄吉への漠然とした関心が、急に生々しい感情となって蘇ったのは、あの夏の夜の食卓で彼の家庭の不和を訊いた時である。

「大槻先生の奥さん、どうなさったかしらね……帰ってらしたの？」
さりげなさを装って亜矢に尋ねたのは、それから五日目だった。

「帰らないよ」

亜矢はこともなげにいった。

「さすがに万年青年の雄ちゃんもこのところ、すっかりジムサくなつたよ」

「ジムサくなつたって……あんた、どうして知ってるの？」

「会ったから」

「会った？ どこで？」

「金泉湯の前でさ。チビの手引いて、湯道具持って入ってつたよ」

「金泉湯って、あの……八幡神社の近くの……」

「そうだよ」

亜矢はいった。

「雄ちゃん、引越して来たんだ。前より安いアパートに。共働きの片方がいなくなつたんだから、セイカツ、苦しいよネ」

「まあ、ちつとも知らなかつたわ。……じゃあ同じ町内じゃないの」

「そうだよ、ひさご食堂の裏のアパートだよ」

「そんなら、すぐ、そこじゃないの……」

「そうだよ」

亜矢は読んでいた漫画から顔を上げていった。

「なにコーファンしてるのさ、母さん」

「だって、あんた、母さんに何もいわないんだもの、びっくりするじゃないの」
「なにもさ、雄チャンと同じ町内になったからって、そんなにびっくりせんかてよろしいがな」

亜矢はテレビで憶えた大阪弁をきこちなく使い、歌代がアパートの名前を訊く前にどこかへ行ってしまった。

歌代は夕餉の買物に行った帰りに、ひさご食堂の前を通ってみた。ひさご食堂とその右手の久米川薬局との間に、人が二人並んで通れるほどの細い路地がある。そこは古い木造家屋や、それを改造したアパートなどが集っている一画で、路地はその中を鍵の手に曲って商店街の表の道に抜けている。

歌代は久米川薬局で洗剤を買ったついでに、さりげなく訊いてみた。

「大槻さんって、高校の先生がこの奥の方にいらっしゃるって訊いたんですけど……ご存知ありません？」

すると思いがけなくすぐに答えが返って来た。

「ああ、大槻先生ね、この奥の右手のアパートですよ。うちの娘の担任だもので、

お世話したんですよ」

「なんというアパートなの？」

「中原荘っていうんです。階段を上って、とっかかりの部屋ですよ」

「大槻先生にはうちの娘がお世話になりましたの。四年ほど前ですけど……」

「そうですね、いい先生ですよねえ、マジメで、朗らかで……もつともここんとこは、朗らかというわけにはいかないみたいだけど……」

多弁な女らしく薄い唇の薬局の女主人はそういうと、改めて

「お気の毒ですよねえ……小さい人を連れて……ご存知でしょう？」

と声を落した。歌代は肯いて、

「小さい子供さん、連れていらっしやるの？」

「そうですね。いいパパですね……まだ三つなんですよ。よくまあ、あんな子供を残して出て行けたと思いますよねえ……いくら恋は盲目といってもねえ……」

「恋？ 問題は恋愛なんなの？」

「そうなんですよ……」

と声をひそめる。

「どちらの恋愛？」

「女の方にきまつてるじゃありませんか。同じ学校の先生ですって。二人でカケオチしたんですよ……」

「まあ……信じられせんわ」

「ホント、私もはじめは信じられませんでしたよ。あんなハンサムないご主人を捨てるなんて……でも本当なんですよ。魔が射したんですよ。大槻先生もいつてらっしゃいましたよ。妻は魔が射したんですって。だから、そのうちに戻ってくるでしょうって……いい方なのよねーエ……戻って来たら許すつもりなのよ」

「そうおっしゃったんですか」

「ええ、私、無遠慮だもんですから、訊ねましたの、そうしたら、何といつてもやっぱり、子供の母親ですから、って……」

「愛していらつしやるのね……」

思わず歌代はいった。

「そうなんでしょう？　子供のためというよりはやっぱり愛しているから許したいんでしょう？」

反対してもらいたいという気持からいったことだったのに、相手は一も二もな

く賛成して声に熱を籠めた。

「そりやそうですわねえ、子供の母親だから、なんていつてらっしゃるけど、本音はやっぱり、愛しているからでしょうねエ、そついうもんですよ。男と女の間つてものはねエ……」

歌代はつぶれた胸を抱いて家へ帰って来た。

3

歌代は自分の性格を生真面目な性格だと思っている。生まれてから嘘をついたことは一度もない、などとはいわないが、少くとも嘘をつくことは嫌いである。相手が誰であれ、自分は人の信頼を裏切るようなことは出来ないと思って今日まで来た。週刊誌やテレビなどで、妻の浮気を取り沙汰されているのを見ると、心に秘めごとを抱いて夫と臥床を共にするなんて、どんなに辛い苦しいことだろう、よくそんなことができるものだったものだった。